
KAITO観察日記

柚木あづさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

KAITO観察日記

【ZPDF】

Z0688E

【作者名】

柚木あずむ

【あらすじ】

巷で噂のVOCALOUD・KAITOの所有者である女性の部屋に現れたのは、「スプレをした不審者」……ではなく具現化してしまったKAITOだった。ちよつと意地悪なマスター視点でKAITOとの暮らしを描いています。

朝、目が覚めて真っ先に思い浮かぶ、この言葉。

「つるさい」

私のさわやかな目覚めは、夏休みの朝の苦しい思い出の歌によつてものの見事に粉碎された。しかも転調されてどこか物悲しげな。これはなんぞや。近所の公園でやつてゐる、ちやめつけあふれるラジオ体操？ 答えは否。ある男が歌つているのだ。

「あ、起きました？」

歌い手は純度100%の苦情にも動じず、にこりと満面の笑みを浮かべた。

「朝から歌うな。近所迷惑、ていうか私が迷惑」

「だつて、新しい歌教えてもらつて嬉しくて」

確かに教えたさ、ラジオ体操の歌。しかも短調アレンジの方。葬式を思い浮かべてしまつのような音楽ではせつかく起きた頭も再び眠りにつかされてしまつようで……。ではなく、純粹に不快だコラ。睨みつけてやつても顔の横にクエスチョンマークが盛大に浮かんでそ

うな顔するし、ああどうしてくれよう、こいつ。

もう春だというのにきつちりまきつけられたマフラー、はにかんだような笑み、くすぐるような甘い声。こいつがいる朝というのもずいぶんと慣れてしまった。

やつとこ成人したばかりの女一人暮らしの部屋に男とは何事かあ、と親でなくとも怒鳴りたくなるかもしれないが、こいつに限つては安全だ。

せつめいするとややこしいので適当にこまかしたいところではあるが、あれこれ言葉を弄したところで事実は変わらない。端的に言うと、こいつは人間ではないのだ。VOCALOIDというDTM製作ソフト、つまりは音声合成ソフトであるのだ。歌声だけの口ボ

ット、といえば話は早いが。

21世紀に入ったとはいえ、人間と見まごつのようなアンドロイドはいまだ発明されていないというのは一般常識なわけで、さらにいえばソースと醤油を間違えるようなドジを踏んでくれるような機械もなかなかない。今一般に普及されているような技術では、0と1でしか物事を処理できないのだ。

こいつも最初はそうだった。血液どころか肉体すらなかつた。パソコンにインストールして楽しむ、この世に無数に存在するソフトウェアのひとつでしかないと、今の私だって理解している。

それがだ。

落雷による膨大なエネルギーがパソコンに流れ込み云々、というある種ベタとも言つべき現象によつて今現在の状況に持ち込まれた。いや、ベタとは思つよ？ だけどそれはアニメやらマンガやらゲームやらの話であつて現実に起こるとなると少し勝手が異なつてくるものだ。実際、二次元の世界に半分足をつっこみかけていた私はあ、遺影になりたい、とかそういう意味ではないのでそこはご安心を その時には軽いパニック状態に陥り、110に電話するか陰陽師を頼るかエージェントを呼ぶのかと、脳みそがショートするのではないかと思うほど多種多様の情報を右往左往させていた。ようやく落ち着きを取り戻せたとき、人間の脳みそがショートするかつ、と方向のズレた自己ツツミを入れてしまつたくらいだから、相当な慌てようだつたのだろう。

こいつも、あの時は私と同じくらい、いやそれ以上の状態になつていたのだと思う。何せ見ている世界がガラリと変わつてしまつたのだから。私がマンガやアニメのような二次元の世界に取り込まれたら、まあそれはそれでオタクライフをガチでエンジョイでき……ではなく、下手したら泣き叫びたくなるかもしない。それをよくもまあ、ここまで順応してくれたのだと野良の通い猫を見つめるエセ飼い主のごとく感心している。

今考へてもあわただしい出会いではあつたが、第一声はよく覚え

ている。

「マスター？」

首をかしげるその男。どこから侵入してきたか、とかそう言つたことは問わない。青い髪に、淡い青色のマフラー、そして口元に伸びるインカム、そして腹チラ。復旧した電気に照らされて、画面を隔ててでしか見れなかつた男と視線を交わしていたのだ。

落雷時の停電にまぎれてタイミング良くコスプレ野郎が強盗まがい……なんてこたあ考えない。いま求められているのはきっと、ストレートかつ、20年プラスアルファで培つてきた常識にひびを入れる発想だ。あくまでひび。木端微塵に打ち砕いてしまつては人間としての何か大切なものを失つてしまつ。

「もしかしなくても……ＫＡＩＴＯ？」

あ、はい。とあつさり答えてくれた。

よし、決定だ。こいつはボーカロイドだ。常識なんてものはトイレのゴミ箱に捨ててやる。トイレットペーパーの芯と生理用品といつしょくたにして月曜の燃えるゴミの口に出してやるから覚悟しておけ。私の夜明けは近い。

「あの、マスター？」

語尾が上がる独特のしゃべり方は、3次元というVOCALOIDとしての新境地に達したがためなのだろうか。なんにせよ可愛いから許す。

……少し頭を冷やそうか、私。

科学の時代に生まれたゆとり世代としては　といふか超常現象と不法侵入者の2択を迫られるどぶつちゃけ後者の方が怖いので目の前の現実は甘受するにしよう。しかしそれで？　こいつはうちで飼うハメになるんだろうか。ペットじゃあるまいし、だからといつて実家からの支援を受けている身ではヒモの存在も許し難い。

どこぞに放り出すか？ しかしこのKAITO、まともに暮らしていける感じがしない。

ところでKAITOはKAITOで良いのだろうか。KAITOは製品名であつて個体名ではない。そのままにしておいても一向に構わんが、それはポメラニアンに対してポメラニアンと名付けるようなもので、出来ることならポチとかタローとか名付けてやりたいのが親心といつもの。ここはマスターとして新しい名前でも授けてやるべきなのだろうか。gooooo先生に聞きに行くべきか？ それとも知恵袋か？ ……いや、ここは民主主義の国・日本。本人の意思を尊重すべきだ。

「あのや……」

「はい」

沈黙が相当答えたのだろう。満面の笑みを見させてくれた。順応早いなあこいつ。

「KAITO、でいいんだよね？」

「はい、それが名前ですか。何か芸名を付けて貰うでしたらそれを名乗りますけど」

芸名ねえ……ここで私オリジナルな名前（例・ゴン太、タマ他）をつけてやつたらそういうことになるんだろう。ええい面倒くさい、KAITOで良い。便宜上、他のKAITOと区別するべくうちのKAITOはカイトと呼んでおくことにしよう。カイトはカイトであつてKAITOではない。

我ながら言葉遊びにしか思えなかつたこの発想ではあるが、意外にも当を得ていたのだから世の中といつもの恥れない。世間一般のKAITOと、うちのKAITOには若干のずれが散見されたのである。

ていうかマスター違つたらずいぶんと様変わりするといつツッコミもあることにはあるんだが（ボーカロイドには詳細なキャラ設定ないからなあ）、基本バカイトな気がするのは何故だろう。本気の

KAITOとか卑怯戦隊とかアイスの王子様とかヤンデロイドとか絶対領域とかいろいろいるはずなんだが。まあ、売り場警備員時代もとい売れなかつた時代の名残なんだろうかね。

そんな疑問はともかくとして、まず、アイスにさほどこだわりはない（それでもソフトクリームは邪道なんだそうだ）。世間一般的のそもそもVOCALOIDが一般的な商品であるのかどうかは別の話として KAITOはハーゲン ツツミ、20円の値上げにもピイと泣きが入るようなやつである。次点でサーティン。

箱アイスで満足してくれるのは非常に助かる。まあ、消費量が尋常じやないのが玉に瑕なんだが。お腹の心配をしなくて良いせいか、三食アイスなどという荒技をやつてのける。それなんて苦行？ 生物ではないがゆえに食費はかからなくて済むと判明した矢先、懐に冬の兆しが見え始めたのは何もアイスだけのせいではない。私の自制心のなせる業だ。だつてカイトが欲しがるんだもん……誰が責められようか。

そして第一。兄弟姉妹という概念がない。ボーカロイドはKAITOだけでなく、初音ミクやMEIKO、鏡音リン・レンのような存在が、シリーズとして名を連ねる。ファンの間では兄弟姉妹として、または先輩後輩として見るのが主流だ。

カイト自身は同じ会社から発売されたものとして多少の思い入れこそあるらしいが、兄弟姉妹のようだとは言われてみるまで思わなかつたらしい。人間で言えばそうですねえなどと新発売の抹茶アイス片手にのんきな発言をしていたのは衝撃だった。

第三に、一見、服に見えるものは体の一部であるらしい。マフラー やインカムのよう見えるものは、人間で言つところに皮膚のようなものであり、取り外し不可とのこと。ネットでよく見かける、裸体にマフラー一枚、通称・裸マフラーをさせるという野望ついた私を昔ながらのチョコバーを咥えながら心配してくれたカイトは可愛かつた。

個人的に残念だったのが、名字だ。初音や鏡音のような名字「らじ

きもの（公式発表では「コードネーム」）が存在するのだ。彼らより前に発売されたKAITOにそれがあつて悪いことがあるだろうか、いやない。というわけで有力な“名字＝始音説”を披露してみたのだが、バーラとストロベリーのマーブルアイスをさらえながら否定するカイトは可愛をあまつて100倍の愛しさを喚起してくれたのだ。

そもそもこういうのが現実世界にいるという事実がもともとおかしいのだが、もしかしたらこういうことはよくあることなのかもしない。外部の人間に事実を伝えようものなら精神病患者扱い、情報を探査するならば貴重な超常現象の一つが闇へと葬り去られることになるのだ。どちらにせよその情報はマトモに発信されることはない。意外と、各地のパソコンからKAITOたちが飛び出しているのかもしれない。……ふう、私もずいぶんとイカれてきましたようだ。

いろいろと新事実を発見しながら暮らしていくのはなかなか楽しい。最初のころとは違い、今はそれほどたいした発見もできないのだが、干物女の典型例である私にとつてはイケメンと一つ屋根の下という状況だけでも大変においしいのである。しかもこれが眞田的に慕ってくれているというのだから、それなんて少女マンガ？ といつた具合のヘヴン状態であることは想像に難くないだろう。

その状況を維持するためのアイスならばと、多少の出費も痛くなくなつてきているのは人間としてどうなのだろうと疑問に思い始めたのだが、依然として財布のヒモは緩みっぱなしである。最近なんかカイトも遠慮がなくなつてきてるし、ああもう、朝からアイスなんてそんなに正露丸のお世話になりたいんだろうかコイツは（腹痛めたことなんてないけど、なんかイメージ的に……）。

確か、冷凍庫には箱アイスが2種類ほど入っているはずだ。期待

に添えずがつくなつとうなだれさせるよつなことにやならんだりつ。案の定どれを食べようか迷つてゐる。ハムスターのよつな後ろ姿が、冷蔵庫をあさり「じそ」と動く背中が、両方とも食べちゃえと開き直つた表情が！ ブログにでもアップして全世界に晒してやりたいほど可愛い！ 嬉しそうにアイスをほおばるカイトもひとつ可愛い。仮にも男（型）相手に可愛い可愛い連呼するのもいかがなものかとは思われるのだけれど。

にしても本当に幸せそつだ。アイス食べてるときが一番楽しそうだ。……こいつらボーカロイドの生き甲斐は歌のはずじやないんだろ？ 製品的な意味で。まあしゃべらせるといつ技もある以上、そうとも言い切れないんだが。

「ねえ、カイト、ひとつ聞いて良い？」

「なんですか？」

「アイスと私、どつちが好き？」

うつ、と言葉につまるカイト。アイスを運ぶ手も止まる。ああ、我ながら意地悪な質問をしてしまつた。さながら仕事に忙殺される恋人に追い打ちをかける女の「ごとく」ではなく。回答のもたらす結果を考えればカイトにとつては拷問だろ？

……考えなしに出た発言とはいえ、なかなかに面白そうではないか。

アイスへの想いを断ち切り私を選ぶなら、その愛の深さを確かめるべく一時期アイスを我慢させる。断アイス。メタボなカイトなんか見たくないわ！ などとこ心のなせる業ならまだ可愛げもあるだろ？ が、アイス禁止令を発動したときのカイトの泣きそうな顔を想像するだけで鼻血が噴き出そうになるというのだから医者もお手上げだ。実際アイスはしばらくおあずけにしよう。アイスなんかと比べて悩む罰だ。となると、泣きついてくるカイトもいざれ見れるわけで。つぐづくおいしく、アイス。ウマウマ。

まあ、マスターたる私を切り捨てアイスに走るよつなら解雇解雇にしてやんよ。無論、これは脅しだ。しかしそこはカイトのこと、

平謝りしてくれるんだろうな。……はて、実際KAITOをアンインストールしてしまったら、この田の前にいるカイトは消えてしまうんだろうか。うーむ、試すのは怖いものがあるな。まあ、脅しだしそんなの関係ねえか。

どっちにせよアイスはなし。アイス大好きバカイト君でもその結果については思いめぐらすことはできたようだ。カイトはうんうん悩んだ末に、遠慮がちに唇を動かした。

「え、選べません……」

回答としては上出来かな。冗談だよ真剣に悩むな、と優しく声をかければ晴れ渡った笑顔を見れてそれはそれで一興、されどこのは追い打ちをかけるが吉と見た。

「へえ、私つてアイスと同列なんだ？」

つぐづく鬼畜属性だな、私。微妙であるらしいことは前から意識していたが、今日を境にどうであると認識を改める必要がありそうだ。そんなことはさておいて、さあカイトよ、慌てふためいてくれたまえ。そしてひざまずくがよい、ふはははは。

しかし、その姿を拝むのはまた次のお楽しみとなってしまった。カイトは凛とした表情で、怒りさえ含んだような目でまつすぐに私を見据えながら、淀みない声で言いきつたのだ。

「違います」

「……何が、どう、違うわけ」

「だって、どう考へても、マスターと食べるアイスが一番なんです。どっちかなんて選べません。あえて言つなら両方です」

これだからバカは嫌いだ。

つもう、心臓が一瞬止まつたかと思つたよ、今！ こんな予想外の可愛らしい回答を大真面目に言つてくれるなんて、そしてそんなもんのために悩んでくれていたなんて、嗚呼、神様ありがとう！ この気持ちを世界中のKAITOファンと分かち合いたい。そして共に悶えたいつ。

「あの、マスター？」

言葉なく拳を握りしめる私が、怒りにうちふるえているのと勘違
いしたのだろう、カイトは少し怯えの入った声をかけてくれる。あ
あ、カイト可愛いよカイト。

「カイト……」

「はいっ」

「ダツツ、食べる？」

ホント、カイトが来てからとこつもの緩みっぱなしだ。財布の紐
も、固く結ばれていた口元も。

(後書き)

マスター × KAITOです。

異議は認めません。作者が「KAITOは相手が女だろうが男だろうが總受けだ!」とかほざくやつなんで。

あと、どこかで見たようなものがところどころ混じっている気がするのよ、気のせいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0688e/>

KAITO観察日記

2011年4月29日20時12分発行